

「住吉の語り部となりたい」 シリーズ第13回

料亭つたも主人・深田正雄

2012年4月25日

戦後の蔦茂：良矩の遊び心とアイデア旅館経営から料亭へ

戦後、良矩・静江の奮闘で昭和21年夏には最も早いペース住吉町二丁目で木造2階建て7室の蔦茂旅館を再興、連日満室状況で繁盛したようです。焼け野原の中、建設に当たり苦慮した点は名古屋市が昭和20年12月に発表した「大中京再建構想」に基づく区画整理事業との兼ね合いであったといわれています。明治から続く八百屋町店は進駐軍将校の宿舎建設（アメリカ村）に伴い土地を全て強制供出、住吉周辺は旧所有者から40%前後の減付により道路公園を拡充するというトンでもない指令でした。事業区域決定前（決定は昭和21年4月2日）に計画を入手、変更あればいつでも取り壊しする条件の下、英文つき覚書を交わし新築建設しました。

祖父が語ったことは、「敗戦国でアメリカ植民地だがや！土地接收が否なら、銃殺・・・といわれたぞ！そして、各寺院の墓場まで掘り起こし、平和公園に移転、寺社は60%前後の土地について供出や換地対応を迫られたのだ。」と聞いています。

この市民の協力による戦災復興計画が、名古屋の中心部の緑・公園、道路建設となり2本の100m道路など尾張藩碁盤割を一層拡充した、世界にも類少ない都市づくりとなっています。

区画整理決定後は、昭和23年には東に隣接して2階建て木造大宴会場を含め5室増築、既に、営業の中心は宿屋から料亭への移行が行われていました。勿論、統制経済の中ですから表向きは旅館のお客様が一緒に仲間と食事するという業態であったようです。

また、昭和26年10月には北側に岩城建築設計事務所・岩城誠一郎氏よる4階建て玄関ビル・数寄屋造り2階建て純和風別館（現存）建設で料亭としての営業形態も整ってきたようです。

終戦直後の開店から繁昌したのは女将静江の気遣い奮闘だけでなく、良矩の遊び心センスがお客様のニーズをつかんだようです。

ビジネスマンに必要な情報として、電話を各部屋だけでなくトイレ内、浴室、脱衣場にも設置、交換台を通じて市外局申し込み後の待ち時間対応でどこにいても通じる旅館として大好評！新聞も近郊区・東京版など10紙以上、テレビも試験放送の昭和28年ごろから全室に完備して、近隣の商人達が「力道山の空手チョップ！」だと連日押し寄せてまいりました。

洋風のトイレ、バスも完備しているハイカラ旅館として話題でした。また、宴会や接待の

対応では、毎日、名妓連芸者衆を2－3名常駐、玄関を2ヶ所にわけ談合などに対処、京料理の薄味会席で板場も10名以上配属して関東や関西のVIP対応できる料亭としての礎を築いていきました。

良矩の長男正矩（父）は名古屋市立第三商業学校を卒業後、箱根富士屋ホテルで3年間修行して、近代ホテルの祖・山口正造から薫陶を受けました。結核を患い、兵役を免れ病氣療養しておりましたが、戦後は良矩の妹が当時、日本紙統制連合委員長・三菱製紙・岡本達郎社長の妻というご縁があり統制物資の紙配給を受ける愛産印刷株式会社を創業し事業拡大しておりました。昭和30年ごろ蔦茂新館建設プロジェクトもあり、印刷業を従妹の主人竹尾氏に委譲して家業の発展に妻・のり子と貢献することとなります。そして、東京都文京区八千代町では株式会社愛工社を設立、次弟・次郎に運営を任せた中堅印刷会社も経営しておりました。

そして、神武景気に沸く国内経済成長の最中、昭和32年には5階建て鉄筋コンクリートビル建設の43畳の大宴会場広間など、7室を新築料亭としての機能を充実させてまいりました。

この頃から、小生の父・正矩は狭い敷地内での増築に対して「日本文化のテーマパーク」としての品格をいかにビル内で維持するか腐心していたようです。石庭の庭園、ミニ枯山水園など各部屋に設置するほか、文化勲章受賞された著名な日本画家の新作を画商などから入手、現在のコレクションに繋がり、季節ごとに名画をお客様に御鑑賞いただけることに、喜びを感じておりました。

また、良矩のアイデアでビルの屋上には名古屋で初めてインドアゴルフ練習場を設置して、接待客の待ち合わせや話題提供の場として、評判となっておりました。

写真：昭和21年建設の蔦茂旅館前景墨絵、当時のままの「ヒノキとシバ材」粋な黒塀と7室の旅館は栄ミナミ・住吉町の癒やしのスポット。

